様式２

平成１９年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ
「生活環境の課題発見・解決型女性研究者養成」教育プログラム
「学生による国際的研究セミナー」実施報告書

平成　20 年　2 月　5 日

教育プログラム推進委員会　殿

国際的研究セミナーの実施について、下記のとおり報告します。

記

（以下の報告については、HP 上での掲載及び印刷物等として公表される場合があります。）

１．氏　名（フリガナ） （代表者）	野村（のむら）　理恵（りえ）
２．所属等	大学院人間文化研究科博士（前期・後期）課程　社会生活環境学専攻 ２回生
3. 共同実施者の学生氏名・所属等	１．姫茹（やる） 大学院人間文化研究科博士後期課程　社会生活環境学専攻　２回生
４．セミナー等の名称	モンゴル民族の生活と住居 ―内モンゴル自治区における天幕住居「ゲル」の現状と今後―
５．開催地	都市名　中国・内モンゴル自治区・フフホト市 会場　内蒙古大学　蒙古学学院

６．開催期間	2008 年 1 月 6 日
７．セミナー等の講師	白音門徳（ばやもんど）　教授（内蒙古大学　蒙古学学院長） 呼日勒沙（ふりらしゃ）　教授（内蒙古大学　蒙古学学院　蒙古族文化研究所） 巴根那（ばがな）　講師（内蒙古大学　蒙古学学院）
８．開催規模	（開催規模はおおよその数で結構です） 参加者数　　16 名

９．セミナー等の内容

目的：

中国内モンゴル自治区は、古くからモンゴル民族が遊牧生活を営んできた地域である。移動を伴う遊牧生活に適応して発達してきたのが天幕住居ゲルであるが、1980 年代、中国政府による定住化政策により、これまでのような移動生活は不可能となった。これを受け、土造やレンガ造の固定家屋が普及し、ゲルは急速に姿を消している。近年は、放牧地において大規模な資源開発（石炭・石油・塩等）が盛んで、これにより牧畜ができず、町へ移住せざるを得ない牧畜民も多い。ゲルの消滅にも拍車がかかっている。

このような状況のなか、モンゴル民族の遊牧文化の象徴でもあるゲルが現在どの程度残存しており、どのように利用されているのか、また今後どのような道を歩むのかを現地研究者を交えて議論することを目的とした。

概要：

中国・内蒙古大学蒙古学学院は、長年にわたりモンゴル民族の文化についての研究実績を残している機関である。草原文化研究の第一人者であるフリラシャ教授より、ご自身の研究について、またゲルの現状について講義を受けた。また現在、ゲルは中国の「非物質文化遺産」登録に申請中である。フリラシャ教授はこの申請にも関わっておられ、申請内容、また政府に認定された場合、どのような方向に進むのかという内容についても言及して頂いた。

バガナ講師からは、新聞学の立場より取材を続けておられるジャルート旗の牧畜民について講義をいただいた。ここでは、ゲルを用いた長距離移動放牧が残っているが、その形態変化や政策的・環境的要因について言及して頂いた。

１０．成果及びその他参考となる事項
（この事業で得られた成果について記載願います。「生活環境の課題発見・解決に関わる成果」は必ず記載。）

本セミナーは、内蒙古大学蒙古学学院との学術交流協定が締結されて（2007 年 12 月 25 日付）、初めての国際交流セミナーとなった。そのため、内蒙古大学副学長で外事も担当しておられる呼格吉勒图教授をはじめ、国際交流掛の担当者にもご出席いただき内蒙古大学及び奈良女子大学両校の交流を進める上でも貴重なセミナーとなった。

また、蒙古学・蒙古文化学・民族学・経済学等の専門家にもご出席いただき、多方面からの議論をもつことができた。

議論の内容としては、モンゴル民族の伝統的な文化である「ゲル」が中国国内でどのように位置づけられ研究されてきたのか、また現在どのような状況にあるのかという話題が中心であった。これは、企画院生の研究テーマでもある。「ゲル」について議論することで、モンゴル民族の伝統的生業形態である「遊牧」や「牧畜」の特徴を理解することの必要性を強く感じた。住居である「ゲル」の実態をとらえることは、モンゴル民族の住環境を含む生活環境全般の変遷経緯の理解に繋がり、またその変遷経緯を知らなければ、「ゲル」を正しく理解できないということを実感した。

更に、住居である「ゲル」のみならず住環境整備にも話が及んだ。その際には、各地域の位置づけや民族別による分類の必要性についても言及され、中国における内モンゴル自治区という特徴のある地域研究の在り方についても現地研究者ならではの意見が出された。

最も印象に残ったのは、院生が奈良女子大学の取り組みについて発表した際、「日本人として、あるいは外国人としてその現象をみたときにどのように感じるか」といった質問が多く出た点である。やはり、現地の研究者が多くの研究実績を積んでいる地域・分野において外国人がどのような視点で課題を見つけ、どのような手法で解決策を見出すのか、その姿勢について大きな関心を寄せられた。この問いに対して明確な回答をできたかと言えば、まだ自信がない部分は多々ある。しかし、私自身の研究を続ける上で常に考え、位置づけなければいけないことであり、このような議論を早い段階で再認識し、現地の研究者と議論できたことは大きな成果であった。

海外をフィールドとして研究する場合、このように現地研究者や更には一般市民との議論を重ねる機会を設けることは、視野が狭くなりがちな調査・研究活動において、丁寧な調査、丁寧な考察の必要性を再確認できる重要な役割をもつと考える。

１１．指導教員の確認	20 年　2 月　5 日	署　名　　中山　徹